

岸俊男先生没後 30 年記念座談会

岸俊男先生の思い出を語る

田 島 公

栄 原 永 遠 男

中 尾 芳 治

泉 森 皎

菅 谷 文 則

川 上 洋 一

目 次

I. はじめに	53
II. リレーでつなぐ岸俊男先生の思い出	53
III. 座談会	64

論 文 要 旨

橿原考古学研究所第3代所長を務められた岸俊男先生の没後30年の節目に、直接薫陶を受けた研究者を招いて座談会を開催した。

さまざまなエピソードから、文献史料と考古学の研究を融合させた日本古代史研究を確立した岸先生の業績を改めて認識するとともに、実証を重んじる研究への慎重な姿勢や、その暖かい人柄についても知り得る機会となった。

田 島 公（たじま いさお）

東京大学史料編纂所 教授

奈良県立橿原考古学研究所 特別指導研究員

柴 原 永 遠 男（さかえはら とわお）

大阪市立大学 名誉教授

大阪歴史博物館 館長

中 尾 芳 治（なかお よしはる）

帝塚山学院大学 元教授

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 理事

泉 森 皎（いずもり こう）

公益財団法人由良大和古代文化研究協会 業務執行理事

奈良県立橿原考古学研究所 特別指導研究員

菅 谷 文 則（すがや ふみのり）

奈良県立橿原考古学研究所 所長

川 上 洋 一（かわかみ よういち）

奈良県立橿原考古学研究所 調査課長

本稿は平成29年6月25日に奈良県立橿原考古学研究所講堂で開催された座談会の記録である。紙幅の都合で内容の一部を割愛した。文字化および編集は当日の録音データをもとに川上洋一・鈴木裕明・高木清生・持田大輔・杉山拓己が行った。

I. はじめに

川上 本日は足元の悪い中多くの方にお越しいただきありがとうございます。ただいまより、「岸俊男先生没後30年記念座談会 岸俊男先生の思い出を語る」を開会させていただきます。本来ならば開会にあたり所長の菅谷文則が挨拶すべきですが、急病でやむを得ず欠席しております。代わりに当研究所特別指導研究員の泉森皎よりご挨拶申し上げます。

泉森 みなさんこんにちは。今日、外は大変な雨ですが、こうして集まっていたいただきありがとうございます。

先生が亡くなられて30年がたちますが、私にとってはこの間のような気がします。先生の最後の頃のこともよく知っていますので、当時のことを思い出しながら話をさせていただきます。

入院直後、先生や奥様から手紙をいただいて、その内容から病気をすぐに治して戻ってこられるのかと思っていましたが、残念ながらお亡くなりになりました。よく考えると、私たちが色々なことをお願いして、ある意味では私たちが先生を使いつくしてしまったのではと思うこともあります。

先生の本来の学問的な厳しさと人間的なやさしさをみなさんにわかっていたいただければと思っています。

川上 まず、本日の趣旨を説明させていただきます。

岸俊男先生は初代の末永雅雄先生、第2代の有光教一先生の後を継ぎ、1984年から1987年にかけて当研究所の第3代所長をお務めいただきました。この間に当研究所では非常に著名な発掘調査が行われています。大峰山寺、脇本遺跡、束明神古墳、藤ノ木古墳第1次調査などです。また、先生が所長の間に今年で37回目を迎える公開講演会が始められました。先生が所長の頃の伝統が当研究所に続いています。

先生は古代の都城、木簡、金石文等の調査を通じて日本古代史研究において多くの優れた業績を上げ、学会を牽引した非常に著名な研究者です。また文献史学と考古学を統合した研究方法を開拓し、飛鳥宮、藤原宮出土木簡の研究、それから藤原京や難波宮の研究等においても多大な成果をあげられました。さらに1984年まで在籍した京都大学では多くの研究者を育成し、史学会理事、木簡学会会長として学会の発展に貢献されました。

本年は岸俊男先生が亡くなられて30年目にあたります。この節目に岸先生を顕彰し、今なお輝きを放つ研究業績や真摯な学問への取り組み、研究者の育成などについて、先生から直接薫陶を受けられた文献史学、考古学の先生方にお話ししたいと考えています。

この後の座談会のコーディネーターを本来は所長の菅谷が務める予定でしたが、先ほど述べましたように欠席のため、コーディネーターを急遽、本日お話しいただく田島公先生にお願いしております。

次に本日の次第について説明します。まずリレー形式で「岸俊男先生の思い出」として、岸先生から直接薫陶を受けた4人の先生方に15分ずつお話しいただきます。その後休憩を挟んで田島先生のコーディネートで座談会を行います。本日は以上の次第で進めますので、よろしくをお願いします。

II. リレーでつなぐ岸俊男先生の思い出

田島 昨年8月27日、東京新聞のフォーラムで、菅谷所長からなまの岸先生を見たことのある人がほとんどいないという話がありました。終了後、ちょうど来年に没後30年になるので、こういう会を催しましょうということになりました。今日お配りしている「年譜・著作等目録」¹⁾がありますが、その時にパネラーの私がこれを入力しておきましょうという話をしてしまいました。そのような事情もあって、私は一番若輩なのですが急遽コーディネートさせていただくことになりました。

それではリレースピーチを始めさせていただきます。まず菅谷所長の代読を川上課長よりしくをお願いします。

川上 菅谷所長の記事「岸先生の思い出」を代読します。

「私の恩師末永雅雄先生と岸俊男先生の御尊父岸熊吉先生は、とても親しかったと聞いている（お二人は戦前奈良県庁で、社寺兵事課や史蹟名勝天然記念物調査会などでご一緒されたようだ）。岸先生が京都大学をお辞めになる時に、末永先生は岸先生にすぐにも橿原考古学研究所の所長になってもらいたかったともらしておられた。しかし手続きが遅れたので別の大学に在籍され、橿原考古学研究所は兼務となった。

岸先生が子どもの頃、御尊父のお供で法隆寺の五重塔の空洞にも入られたようで、その思い出を楽しく話されていた。また、先生は「私は音羽の滝の産湯につかった

のだ」とよくおっしゃっていた。つまり御尊父が京都で建造物の保存修理にたずさわっていた時に岸先生がご誕生された。

岸先生の仕事であまり知られていないが、奈良市役所が平城京の模型の作成を計画した際、岸先生が「平城京の水田の地割をきちっとせなあかん」と言って、くわしく調査して報告を出された²⁾。その調査研究が千年たつてどのように地割が変遷したかを検討する基準になっている。学界に貢献した岸先生の大きな仕事の一つであると思う。

また、岸先生が京大の最後の年に、新羅の都、慶州の都市計画について調査するため、実際に韓国に2か月間下宿されていた。帰国後岸先生は「菅谷、だいぶおもしろいことがわかってきた」と楽しそうに言われていた。

先生を中心に3度の中国調査を実施した時のこと、1回目・2回目の団長をしていただいたが、3回目の時に「絶対に団長はしない」とおっしゃった。団長は乾杯などの公式行事ばかりで勉強もできないし、楽しくないということだった。そこで3回目は平の団員としてご参加いただいた。

先生は古代史から歴史地理を研究された人である。「博物館の展示図録とは別に立派な本を出さなあかん」と言われていた。図録は博物館に来てくれた市民向けのもので、それとは別に研究書を出さなければならないと常におっしゃっていて、ご指示に従って貿易陶磁の本を出版することができた³⁾。ただし、その時にはすでに岸先生はご不在であった。

これからは市民にも開かれた活動もしていかないとだめだと考えられていた。ある時研究所に映画「はないちもんめ」の撮影をさせてほしいと電話があった。当時の副所長などは断ろうとしていたが、岸先生は「これからの研究所は、市民還元をもっとしていかないといけない」、「そういった方面にも柔軟に対応していかないといけない」とお受けされ、撮影が行われた。

後日談として、その映画には女優の十朱幸代が出演していて、岸先生は「サインをもらっておいてくれ」と、にっこりと笑われた。

岸先生は、橿原考古学研究所と観光を結びつけたり、たくさんの夢を持っておられた。ところが先生は急がれてしまった。

先生が入院された後、県立医大から博物館に電話があ

り、A型の職員を連れて病院に来てほしいと言われた。A型の十数人で病院に行つて献血をした。それから週に1度くらい、2、3人が献血に行かせていただいた。私は第1回目に参加し、あと2、3回は行かせていただいたと記憶している。その献血をした全ての者は、先生が最後のお力をしばって著書を完成させられたことに、ごく少しではあるがお役に立ったことをもって、先生をお送りさせていただいたと思っている。

先生との最後の別れは、亡くなる3日前になら・シルクロード博覧会関係のことで、奈良県立医大に入院されている先生にご報告とご相談に行った。そうすると先生は「元氣にならないかん」、「元氣になるわ」とおっしゃっていた。翌日中国に出張し、その先の燕京賓館に先生の訃報が届けられた。

藤原京のこと、飛鳥宮のこと、大峰山寺のこと、束明神古墳のことなど、思い出すことはたくさん、たくさんある。岸先生のお考えにもとづいて、日々新たな研究所を形成していくことを大いに感じている。」

田島 川上課長どうもありがとうございます。続きまして榮原永遠男先生にお話をいただきます。

榮原 榮原でございます。短い時間ですが、少し岸先生の思い出を話させていただきたいと思います。今日は他の方々が学術的な話をたくさんされると思い、私はそれはやめて、ある意味では人柄についての思い出話みたいなものに集中してお話をするのがいいかなというふうに思いまして、その方面で準備をさせていただきました。

岸先生は1958年に京都大学文学部の助教授になりました。当時38歳だったようです。1984年に退職されるまで26か27の学年の卒業生を送り出されたと思います。私は1970年3月の卒業なので、上から11学年目になると思います。岸先生の京都大学における真ん中の少し前くらいの卒業生にあたります。岸先生の助教授時代の最後の学年です。同じ学年では、学部から博士課程まで、もう亡くなった京都大学におられた鎌田元一氏とずっと一緒でした。私は1967年の4月に教養から学部になり、国史学専攻に属しました。その時岸先生は47歳だったと思います。

その1967年4月から学部での授業が始まり、私は専門の授業が初めてだったので、緊張して臨みました。大きく二種類の授業をされて、一つはひたすら講義をする

もの。もう一つは史料を読む演習ものの授業。何種類かありましたが、大きくは二つのタイプだったと思います。まず講義ものですが、非常にたくさんの史料を黒板にずっと書く授業でした。色々な史料を書き、それを我々が一生懸命写すという授業で、非常に淡々としていて、ある事についてとくに力をこめて話すということがあまりなく、割と平板な感じの授業だった記憶があります。先ほど言った鎌田君は「それがええんや」といつも言っていたのですが、当時の私にはどこがよいのかよくわかりませんでした。しかし後に自分が講義をするようになってから、非常に選択、整備された形で史料を提示されていたんだということが、よくわかるようになりました。

もう一つが演習もので、これには忘れられないことが色々ありますが、3回生の時に史料講読で「天武紀」を読みました。なぜ「天武紀」を選ばれたかですが、この頃が岸先生の学問の上で非常に大きな転換期で、都城制研究に大きく舵を切る時期にあたっていたわけです。それで「天武紀」を選ばれたのだと、後でわかりました。

学生が順番にあてられて、調べてきて発表するのですが、一生懸命調べてきても先生は反応が乏しいというか、何か別のことを言い出すのです。誤解のないように言うと、無視をするとかそういうことではなくて、うまく言えませんが、こちらも一生懸命調べてきて話をするんですが、知らない間に別の話になっているということがよくありました。私は初めての専門の演習でしたが、案の定全然反応がなく別の話になりましたので、非常にショックを受けた記憶があります。

先生は国史学専攻の院生や学生に対しては、いつも非常に襟を正して、姿勢を正して接していたのでなかなか近寄り難くて、学部時代や院生の時代を通して、授業以外で直接話をした機会というのは、本当に数えるぐらいしかなかったのではないかと思います。ほとんど言葉を交わした記憶がないという状況です。ですから他専攻の院生、例えば地理学に進んだ高橋誠一君や今日来ている戸祭由美夫さんと話した時に、逆に彼らから岸先生のことを聞くことがしばしばあって、彼らには「えっ、知らんのか？」とよく言われた記憶があります。だから私たちが見ていた岸先生というのは、だいぶ姿勢を正した姿だったんだなということを感じまして、今日お話いただく他の先生方の話のほうが、むしろ「リアル岸」とい



写真1 柴原永遠男氏によるリレースピーチ
うことになるのかもしれませんが。

今の話と続くのですが、先生は、特定の学生・院生と深く関わるということがなかったと思います。しかし学生・院生のことはよく見ておられて、私の場合も、これから話すようにいくつか適切なアドバイスをしていただいた経験があります。おそらく他の院生・学生に対してもそうだったのではないかと思います。

私は卒業論文では実は行基を取り上げて、宗教運動史みたいなことをやろうと思っていました。しかし事情があって修士課程1回生の途中で流通経済史に大きくテーマを転換しました。大転換なのですが、その一端で貨幣、お金の事も研究の視野に入ってきたわけです。岸先生は院生が研究テーマを転換するわけですから、指導教官として色々思うことがあったと思いますが、テーマの変更については何も言わず、一言だけアドバイスをいただきました。

それは「古銭の収集はするな」ということです。その時は意味がよくわかりませんでしたが、指導教官が言うのでとにかく守りました。そのことはずっと引っかかっていたのですが、だんだんわかってきました。お金は魔力があって、収集するとそこにのめりこんでいく方が多いんです。収集界ってすごい世界なのですが、収集にのめりこむことで私の研究が歪んでしまわないかということへの配慮だったのだということがわかりました。あともう一つは貨幣史をするのではなく、流通史をせよということだったのだなということも後になってだんだんわかってきて、私にとって非常に適切なアドバイスをいただいたといまだに思っています。

もう一ついただいたアドバイスは、私は大阪市立大学へ行く前に追手門学院大学に就職したのですが、その時

にちょっと呼ばれて言われたことです。それまで大学の授業は全く経験がなくて、追手門学院で初めて大学の授業をやったのですが、その時に自分の専門、つまり流通史とは全く関係のないテーマを選んで講義しなさいと言われて、それも私は一生懸命守りました。そこで私は卑弥呼から平安時代の終わりくらいまでの、日本の外交史の授業をずっとしました。ものすごくしんどかったです。外交史の論文を今まで一本も書いたことはないのですが、その時の講義ノートは色々なことを勉強する時に今でも取り出して、まず見てからやるということでも役に立っていて、これも私がいただいたアドバイスで、大きかったのではないかと思います。

私の場合、そういう適切なアドバイスをいただいて、後で振り返ってみるとそれが私にとってはかなり重要だったんだということを、折に触れて感じた次第です。

先ほど特定の学生・院生とあまり深く関わらなかったということを言いました。それについて私は学部や修士課程の頃は何か物足りなく感じていましたが、自分が大学に行って学生や院生と接するようになってから、その意味を非常によく実感しました。この特定の学生・院生と深い関係をもってはいけないということも、先生から学んだことです。

しかし一方で、院生に対して非常に厳しい目をもっていたことも確かで、これも私自身の経験を言うしかないんですが、先ほど言った追手門学院に就職した時に推薦状を書いてもらいました。封をしてあったので私は読んでいないんですが、後になってその内容を別の人から聞いたことがあります。伝聞なのでどこまで正しいのかわからないんですが、私には非常に厳しい内容でした。

その段階で私はすでに何本か論文を書いていたのですが、その推薦文によると私の仕事の中で最も評価すべきものは「出土銭貨一覧表」⁴⁾だと書いてあったということです。

これは私にとって非常に衝撃でした。私にとっては論文が一番大事であって、その論文を書くための諸作業のつもりで書庫に入って報告書をたくさん集めて出土銭貨一覧表を作ったわけです。そしてそれが一番よってと言われて、つまりそれは先生にとって私の論文なんかは確実なものではなくて、事実を集積した一覧表というものこそ大事なんだというメッセージだと思うんです。岸先

生は私にそれを伝えるつもりはなかったと思うんで、今言ったように別の人から後で聞いたことなんですが、これもその後の私にとっては非常に重いことで、今もいつも論文を書く時に、「たいしたことない論文やなあ」とどこかで言われているんじゃないかと思っています。このように他の方については知らないんで、私個人でいえば非常に厳しい経験もしてきました。

そういうことで、何か他愛もない話ばかりをしましたでしたが、岸先生がどういう方であったか、私が見た一端を感じ取っていただければ大変ありがたいと思います。

田島 栄原先生どうもありがとうございました。私は最後に指導していただきましたが、今栄原先生が言われたように先生は本当に公私の区別をつけられる方で、私自身も大学時代に交わしたのは禅問答のようで、わずかな言葉をどうやって解釈するかというような形でした。先生は全然変わらなかったんだと思いました。

それでは次に中尾芳治先生にお話をうかがいたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

中尾 中尾でございます。私は1955年に歴史の勉強をしたくて京都大学へ入学しました。その頃京都大学では1回生は宇治の分校で講義を受けることになっていました。その時に国史学Ⅰという講義をとったんですが、それを担当されたのが岸先生です。1955年に奈良女子大から京都大学教養部の助教授として赴任して来られた、その年に講義を受けたということです。

今日の写真の中にもありますが、長身白哲の非常に若々しい先生でありまして、その講義も四国の片田舎の高校から出てきた私にとっては今まで聞いたことのない非常に新鮮な講義で、やはり大学の講義というものは違うものだと思って大変感激した記憶があります。

その時に岸先生は出版されたばかりの末永雅雄先生が編集された『空からみた古墳』⁵⁾を参考書の一つとして使って古墳時代の講義をされました。私は後に考古学を専攻して末永先生のことももちろん学ぶわけですが、その時は全く知りませんでした。末永先生の名前は岸先生から初めて聞いて、そういう古墳の研究者がいるということを知ったわけです。その時このテキストは私にとっても非常に新鮮に映りまして、その『空からみた古墳』は現在も大事に保存しています。

それから、先生の講義の中で覚えているのは、天武朝



写真2 中尾芳治氏によるリリーススピーチ

の政治を論じた際に「皇親勢力」という言葉が使われたのです。これも高校の日本史の授業では聞いたことがなかったこともあって、先ほど言ったように、大学の講義はやっぱり違うなど、そういう印象にもつなりました。

私は後に考古学を専攻しましたので日本史の岸先生とは大学時代は直接お近づきになる機会はありませんでしたが、卒業して1960年から山根徳太郎先生のもとで大阪の難波宮の発掘事業に携わるようになりました。難波宮の発掘、とくにその初期の段階では末永先生や上田宏範先生、若くして亡くなった藤原光輝さんといった榎原考古学研究所と関係の深い先生方が関わっていたこともあって、難波宮の発掘を通じてそういう先生方にお近づきになる、あるいは教えを受ける経験をしました。

後に『日本古代宮都の研究』⁶⁾という亡くなられた後に出版された本の中に、先生の都城制に関する研究成果が集約されていますが、先生の研究テーマの一つが日本の古代都城制にあったこともあり、難波宮の発掘をしていた私とのつながりが生まれたわけです。それで難波宮の発掘現場に見に来られた先生に直接色々と説明したり、教えを受けたりすることがありました。

その都城制研究の面で私が一番岸先生の思い出になっているのは、1981年に「日本都城制の源流を探る」というテーマで岸先生を団長にして中国へ行き、中国の研究者と公開討論やシンポジウムをしたり、西安、洛陽などの日本と関係の深い都城遺跡を見たことです⁷⁾。

これにも色々なエピソードがあって、1980年でしたか、当時中国の社会科学院考古研究所の副所長だった王仲殊先生が中国の研究者の訪日団を率いて来られ、その時に難波宮も見学されました。私が復元された奈良時代の大極殿の基壇の上にご案内したのですが、その時に王

仲殊先生が開口一番「山根先生は今どうしておられますか」と聞かれたのでびっくりしました。すでに山根先生は亡くなられていて、そのことを申し上げると、「それは大変残念です。実は山根先生からは中国の大明宮の遺跡を見たいというお手紙をもらっていたけれども、当時は文化大革命の最中でとても返事が出せないままに終わりました」ということだったんです。

山根先生は難波宮の研究過程の中で当時出版されたばかりの唐時代の大明宮の発掘報告を読まれて、そこに出されている大明宮の地形図が難波宮のある大阪城一带の地形と非常によく似ているということで、難波宮は大明宮をモデルにして作ったんじゃないかと考えられ、それを実地に確かめたいということで手紙を出されたのですが、結局梨の礫で、当時先生は「せっかく丁寧に手紙を出したのに全然返事もよこさない」と言って怒っておられたことがあったのですが、それはそういう中国側の事情で返事ができなかったということだったんです。

私は1978年に、奈良文化財研究所におられた、もう亡くなられた町田章さんを団長とする訪中国のメンバーとして中国へ行き都城遺跡などを見たのですが、もう一度中国へ行きたいという強い希望があり、色々方策を探っていたところだったので、ぜひまた中国へ行きたいということを王仲殊先生に伝えますと、「山根先生に代わってぜひいらっしゃい、歓迎します」ということになったわけです。

そこで急遽日本で都城遺跡の調査研究に携わっておられる方々に呼びかけて訪中国を作り、団長には岸先生にぜひなっただきたいということで、当時NHKで日本の古代宮都のテレビの講義⁸⁾を担当されていて忙しかったんですが、なんとか無理を聞いていただいて岸先生を団長にして1981年の夏に中国へ行き、考古研究所でシンポジウムを一日やりました。

これには中国側の先生方にもたくさん参加していただきました。まず岸先生が「日本の都城研究の現状と問題点」という講演をされ、その後我々日本の都城遺跡を掘っている者が難波宮、藤原宮、平城宮や飛鳥京、長岡京、平安京の調査成果を報告し、その後日本都城制の源流をテーマにしてシンポジウムをしました。

岸先生は、従来平城京をはじめとする日本の都城制を唐長安城の模倣と考えるのが通説になっているが、近年



写真3 第2次訪中国（1983年8月）の際の岸先生
（右から2人目）中尾芳治氏提供

の発掘成果や研究の結果、平城京の原型が藤原京にあることは明らかであり、中国の都城制との比較研究はまず藤原京との間で行われるべきであるということ、そして藤原京の源流は隋唐の長安城よりもむしろ長安城以前の北魏洛陽城や東魏の鄴城なんかに近いんじゃないかと、そういう有名な持論を展開されたわけです。

それに対して王仲殊先生や唐代の長安城の発掘を長年やっておられた馬得志先生、徐苹芳先生といった中国側の研究者は、そうではなく日本の都城制の源流は唐の長安の都城制に加えて洛陽の都城制に源流があるんだということ力を説かれ、大変熱のこもった討論が行われました。

その後中国側の厚意もあって西安の唐代の大明宮や興慶宮といった都城遺跡を回ったのですが、岸先生は非常に熱心に現地を踏査されました。中国の場合みんなで円卓を囲んで一緒に食事するわけですが、食事が済むと先生はすぐ外へ出て行き、自分の目で街の様子や遺跡の状況などを丹念に見ておられた記憶があります。

西安の華清宮で泊まったんですが、その時も朝食前に早く起きられて、驪山に登られて踏査をされました。ところが先生だけが朝食の時間になっても出てこれないということで、驪山へ登られたということはわかっていたので、ひょっとしたら遭難されたか、迷子になられたんじゃないかということで、ちょっと騒ぎになったことがあります。このように中国でも寸暇を惜しんで調査をされていた先生の姿が非常に印象的でした。

栄原先生の場合は直接の師弟関係で厳しかった面があるのかもしれませんが、我々は考古学ですから専門分野が違いますし、先ほど言ったように第1次の訪中国の時は13日間だったんですが、毎日一つのテーブルを囲

んでわいわい話をしながら食事をして、そういう時に先生は非常にリラックスして、大声で笑ったりされることも多かったんです。そういう時の缶ビールを乾杯しながら笑っている写真（写真3）もあるんですが、檀考研の石野博信さんに言わせると「岸先生のこんな笑顔は見たことない」ということでして、先ほどの謹厳な岸先生の印象と相通ずるんですが、中国へ行った時は本当に先生自身もリラックスされていたのか、のびのびと遺跡踏査を楽しんでおられた様子が印象に残っています。

中国へは結局中原地方と2回目は江南地方⁹⁾、それから3回目は山東・山西の都城遺跡¹⁰⁾と3回訪中団を送りまして、その都度先生には団長を引き受けていただきましたが、先ほどの団長をやりたくなかったという話は初めて聞きました。その団長になってほしいとお願いしたのは私なのです。確かに団長になると色々な中国側との儀礼的なやりとりがあります。一緒におられた直木孝次郎先生はそういう役から離れて随分リラックスされていたようですが、そういうのが岸先生にはあまりうれしくなかったのではないかと今は思います。

しかしそういうことはあっても、この3回の訪中国の時期は岸先生の研究の面でも、他の面でも非常に充実されていた時期ではないかと思っています。この時の調査報告書の中で岸先生が書かれています、日本の都城制研究においても、それから岸先生ご自身の研究の上でも非常に有意義なものであったのではないかと考えている次第です。

大分時間が超過しましたので、これで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

田島 中尾先生、貴重なお話ありがとうございました。

それでは続きまして先ほどご挨拶いただいた泉森皎先生にお話をいただきます。よろしくお願いします。

泉森 先ほどお二人の先生方から非常にオーソドックスな話をいただきました。先生方は大学、大学院を通じて正統な勉強をしてされましたが、私は郷土史から考古学に興味をもちました。新聞でよくどこで遺跡が見つかったとか、どんな遺物が出たとか、よく当時の大阪の南部版の新聞に出ていたので、考古学というのはおもしろい世界だと、早くから影響を受けて、大学へ行かなくてもこういうことをして楽しむのも人生だなと思っておりました。

その頃、参考書として最初買ったのが平凡社の『世界考古学大系』3巻です。この中の「古代豪族」が岸先生の論文です¹¹⁾。大学受験を前にして、いくら英語の本や参考書を読んでもさっぱり頭に入りません。しかしこの論文は非常にわかりやすいものです。この中に大和の豪族の勢力圏の図があります。

当時高校の図書室には色々な報告書がありました。その報告書の最後には必ず、こういう調査結果をもってこの地域の古墳文化を知るべしというふうに書かれています。どういう遺物が出ているとか、石室の構造などはわかります。では文化史的価値や誰の墓かという、その答えが何もそこには書かれていません。高校生にはこういう記述は物足りません。もっとストレートでわかりやすい参考書がほしいというのが私の願いだったんです。

その頃有名な論文で小林行雄先生の三角縁神獣鏡の同範鏡理論¹²⁾というのが流行っていました。これもものすごく難解で、何回読んでもわかりません。普通だったら2、3回読んだら大体わかるんですが、このわかりにくい本はなぜみんなにもてはやされるのかなあと、不思議に思いました。

岸先生の論文の中の、豪族の勢力圏とそこに分布する古墳はその地域に関わる人たちの墓だということを暗に示している図ですが、こんなにわかりやすいものはありません。いまだによく使っています。とくに山辺の道の周辺、天理市の布留のあたりは物部氏、ずっと北の方へ行くと和爾系の一族の話が説明されています。今でもこの地域には寺院跡などがあって大体場所も比定できるわけです。それで春日大社へ行って、春日氏の拠点はどのあたりにあったのかと思って、春日の若宮のあたりの山裾に注意しながら「御蓋山からは少し外れるなあ」とか思いながら散策しています。だから私にとってはこういうわかりやすいものを作ってもらって考古学と古代史の関係がよく理解できます。

次に、私が大学3回生から4回生にかけて関西大学と和歌山市教育委員会が合同で岩橋千塚古墳群を調査することになりました。岩橋千塚で一番大きいのは天王塚古墳、次が知事塚古墳、郡長塚古墳と古墳の大きさによって名前がついていますが、それがどういう人たちの墓なのかというのが大きな問題です。これについて岸先生はちょうどその頃「紀氏に関する一試考」という論文を書

かれました¹³⁾。

これによって紀ノ川流域の古墳文化は紀氏に密接に関わるということがよく理解できました。岩橋千塚の南には椒浜古墳があります。いわゆる蒙古鉢形の冑が出た古墳です。紀ノ川の北岸には馬冑が出た大谷古墳があり、紀ノ川を遡って奈良県の五條猫塚古墳でやはり蒙古鉢形の冑が出土してしまして、この紀ノ川流域の文化を一つの通しで見ることができるようになったわけです。

この論文が出たので何回も読み、岩橋千塚の調査に赴きました。だから古代史と考古学を自分の中で整理しながら勉強できました。とくに私が感激したのは、紀ノ川流域だけではなく、大阪側の淡輪に西陵古墳と淡輪ニサンザイ古墳という二つの大きな古墳があります。このことが『日本書紀』の雄略天皇のところにも出てきます¹⁴⁾。紀小弓が亡くなったので彼の墓を作ってやれと雄略天皇が指示したという記事です。これなど現地と非常によく合う話だと思いました。こういうものを読んで考古学と古代史との関わりを非常に密接に感じてきます。

そういうことをしているうちに大学を卒業することになりました。末永先生から「大学院へ行くのか」と何度も言われましたが、「実は色々なことがあってちょっと無理なんです」と断りました。家庭の事情もあったので、大学院に行くということを言い出すことはできませんでしたが、それで勤めることにして教員になりたかったのですが、奈良県から声がかかりまして、末永先生は「大学院に行ったと思って奈良で頑張れ」と言われました。

色々な事情がありましたが、そこから奈良県での技師の生活が始まって、その最大のものが藤原宮の調査に関わったことです¹⁵⁾。藤原宮の北側あたりを斜めにバイパスが通る、宮の中を横切っていくという大変な話です。橿原市四条町のところから北東に斜めに走って、大極殿院や内裏のあった醍醐池の北側を通過する道路計画でした。

これは宮跡の調査に関わったことがなくても、平城宮や平安宮を見ればそこは内裏の推定地になります。しかし藤原宮は大極殿を中心としたところだけが史跡になっていて、北の方は未指定で放置されていたのです。

そこを調査することになりました。最初の調査は1966年の12月から始まりました。ただその時は道路予定地以外を掘ってはいけないという難しい条件をつけ

られて、その中で打って返しという方法で調査を始めました。最初に半分を調査して、それが終わったらそこに土を置いて反対側を掘るという、非常に手間がかかるやり方です。しかし遺構がたくさん検出され、木簡も出土したことで、次の年から国庫補助金が認められ、4か年にわたって発掘調査をしました。私も地元高殿町の一角のお宅に下宿させてもらって、4年間調査に従事しました。対象地全体のなかで、宮の北限をどのように検出するかということが命題でした。

色々な先生方の論文を読みました。今は当たり前のようなことですが、当時はまず下ツ道がどこなのか、次に中ツ道や横大路はどこなのかということがわからなかったのです。

都城研究で第一人者と言われた喜田貞吉先生は、下ツ道の位置を現在の近鉄線の通っているあたりとして西の京極を定めています¹⁶⁾。同じくその頃条里の研究を進められていた田村吉永先生は、この地域に残っている条里遺構をもとにして都城の研究をされました¹⁷⁾。条里と条坊の関係も判明していませんでした。条里をもとにして復元図をつくっておられたのです。このように色々な要因で藤原京の条坊研究を困難にしている状況がありました。

その中で岸先生は、様々な検討を行っておられました。たぶん先生のお宅にも資料があったんだと思います。藤原宮の最初の調査をされたのは日本古文化研究所というところですか。日本古文化研究所は三菱財閥などから研究費をもらって、黒板勝美先生が委員長になって藤原宮の調査を行いました。一番上が足立康先生で、その次が岸先生のお父さん、岸熊吉先生、そしてその下で松崎宗雄さんが現地調査を担当されました。そんなことで岸俊男先生は2代にわたって藤原宮の調査に関わられたのです。

私たちは発掘担当者でありましたが、よく考えると委員であった先生が本当の調査担当者で、我々は従業員だったのです。先生は私たちのデータをしょっちゅう検討されて、3000分の1の大きな地図を2枚合わせて、上・中・下の古道や日本古文化研究所の調査結果を記入しておられ、その後発掘で検出される遺構をそこへ記入して、そして全体像を見ようということをされていたのです。私たちは掘っている部分しかわかりませんでした。だから



写真4 泉森皎氏によるリリーススピーチ

私はいまだに自分が従業員であったと思っています。

こうして調査をしているうちに、ここから出てくるものの、とくに木簡関係についてはどうも古いものがあるということになりました。藤原宮の時代よりも古い天武朝のものがある。もしかすると推古朝のものではないかと思われるような木簡も出てきているということでした。

先生はある時現場に来られて、とくに溝の調査について「あなたたちはなぜ古墳の石室の中を掘るような形で作業ができないんですか」と言われました。ちゃんとグリッドを細かく設定して、上のものから順番に丁寧に掘っていくようにと指示されました。

内裏の北東に近いところで調査したSD105という溝から木簡が出ています。上層・中層・下層の土層と細かいグリッドにも分けて出てくるものを、今日はどの部分を作業しているかということをはっきりさせたラベルを入れ、高殿の発掘現場から当時の研究所の収蔵庫へ持ち込んでいました。毎日バケツで2～3杯分、泥と木屑の入ったものを運び、それを先生自ら洗っていただきました。先生の助手は長く和田萃さんがしてくれていました。奈文研からもお手伝いが来てくれて、木簡の整理をやっていました。

とくに古い木簡の中で、「評」と「郡」、どちらも「こおり」と読みますが、この「評」がいつまであったのかということで、「郡評論争」という著名な論争がありました。それがこの調査で土層の上下関係から大宝律令以前のものは「評」であって、以後のものは「郡」であるということも決定されました。我々が泥を持ち帰って作業していると先生は時々講義をしてくれて、注意点などを教わりました。

藤原京の京域が先生の手元の資料で次第に整理されて

いきました。隅田池という池があります。宮の隅付近で、示唆的な名前なんです。その近くで東西方向の大垣が見つかりました。その大垣が南に折れ曲がって北東角になりそうなところを先生が図面上で示され、ここを掘るようと言われました。

それは8月頃の非常に暑い日で、掘ってもすぐ乾燥してしまい、なかなかその柱列が検出できなかったのです。「先生出ません。こういう状態です」と報告したら、「一回水を打ってシートをかけておきなさい」と言われて、それから夕立か何か雨が降った時に、はっと気づいて急いでそのシートをめくってもう一度そこを検出したのです。そうしますと南へ曲がる柱列が出てきて、北東隅部が確定したのです。

これによって藤原宮の北側が大体明らかになりました。藤原宮の中軸線は大極殿から算出していましたので、それからの距離分を反転させて、西側の垣部分の調査も行って範囲を確定させたわけです。私は大観して遺跡を見ると目が足りなかったのです。先生の方はずっと前を進んでいて、宮域から京域という概略がすでにできていて、それをもとに調査結果をあてはめておられたわけです。

先ほどのお二人の先生方は大学や大学院で岸先生から学ばれたわけですが、私はこの藤原宮の発掘現場で教えていただきました。末永先生とは異なる考古学と古代史の視点を岸先生から教えていただきました。

現在は、耳成山の北側でも条坊が検出され、いわゆる大藤原京というものが考えられています。東西各四坊、南北十二条と規定がありますから、それに基づこうとすると一坊の大きさを4倍にしなければなりません。しかも西辺はまだ微妙なところですし、それからずっと南へ行って、檀原神宮の外苑から神武陵、そしてその西の以前農業試験場があったあたりの調査が充分されておられません。それから北東の隅についても、それらしい溝などは出ていますが、それがどこまで延びているのかもまだ確定しておられません。だからこうした復元案をさらに検討しなければなりません。

現在の京域の議論を見られたら、岸先生は多分お怒りになるだろうと思います。もっとちゃんと証拠を固めてからこういう条坊の問題をやりなさいと言われると思います。

私は岸説にもとづいて何回も現地を歩いて、下ツ道や中ツ道はどれなのか確かめました。中ツ道は現在の檀原市と桜井市の市境として残っています。そして横大路も耳成山のすぐ南側を東西に走る道で、これは二上山の南東の竹内の方まで続いています。

岸先生は畿内の古道の解明に力を注がれ、難波宮から上町台地を南へ進んで、堺市の一角で今度は東へ折れて、そして最後は横大路につながるということも書いておられます。先生は藤原京をもとにずっと広い範囲で考えておられて、先生の後半部分の論文には藤原京を起点にして発展させた畿内制についての内容が多く見られます。

少し時間をいただきましたが、先生の学問の厳しさと優しさについては、また後ほど話したいと思います。ありがとうございました。

田島 泉森先生、岸先生の論文に関する思い出、さらに藤原宮・藤原京跡の発掘調査に基づくお話をありがとうございました。それでは次は私になります。

今日お配りしている資料の中で、まず先生の年譜・著作等目録は、没後30年ということで菅谷所長の方から新たに監修しろということで作成させていただきました。

先ほど申しましたように、私は京都大学の大学院生の中では最後に卒業論文と修士論文を見ていただいて、その時に先生は退官されました。他にも何人かおりますが、一応最後の弟子ということでお話をさせていただきます。

また、岸先生が最後の1年間の講義をするにあたって、就職していた先輩から「一言も漏らさずノートをとれ」という厳命がありましたので、毎回必死にノートをとりました。他のみなさんは色々忙しかったりしていたので、おそらく授業に全部出たのは私だけだと思います。こういった事情もあります。

岸先生は、先ほど栄原先生が言われたように非常に公私を分ける先生だったので、大学院生の頃は本当に話をすることは少なく、先生と対話をしたのは修士論文の題目を提出する時に見ていただいたのと、もう一つはどうしても宮内庁書陵部で史料を見なければならなかったため、相談に伺った時の2回くらいです。あと修士論文の試問の時が、ある意味対決の場と言えるでしょうか。ということで、先生に教えるようなことは大学院生の時には本当に失礼にあたるという感じで、ほとんど禅問答のような会話だけで先生がわずかにおっしゃった



写真5 田島公氏によるリリーススピーチ

ことを深く考えるということをしていました。

先生が退職されてから、『福井県史』¹⁸⁾などのたまっていた仕事がいっぱいあって、私や本郷真紹先生（現立命館大学）とか吉川真司先生（現京都大学）が、岸先生の押上町のお宅に伺って、編集作業などをしたことがあります。そういうことはそれ以前はされませんでした。そこで、京都大学の主任教授を「天皇」に例えれば、退職した先生は「院」になったら自由になるのではということで、他の院生は我々を「院の近臣」とか言っていました。

今日は思い出を語るということもあるのですが、菅谷所長から目録を作れという厳命があったのと、たまたま泉森先生の資料を直前に見たこともあり、ちゃんと論文に即してお話ししないといけないと思い、配付資料では「岸俊男先生最終講義題目「古代史研究の回顧と課題」—先生の軌跡と退官後に目指そうとしたもの—」という題目として仰々しいですが、簡単に話をしたいと思います。

今回先生の著作目録を私が新たに監修し直しました。お持ちの方は少ないと思いますが、元々は「岸俊男教授年譜・著作目録」¹⁹⁾という、退官の際に先生が配った目録があります。それはほとんど先生がご自身で資料を提供されたものです。その内容とかなり重複しますが、先生の退官論集下巻の中に、「学而不思則罔 思而不学則殆—著作摘録—」というものを書いておられます²⁰⁾。さらにその後先生が亡くなってから1988年に京都大学の国史研究室で追悼の会が行われた際にその増補版を作りました²¹⁾。この時にかなりの増補データを提供したのが実は私です。

その後もちょくちょく気がついたところをメモしてまして、今回没後30年ということで整理をしました。新たな増補としては、参考資料として『続日本紀研究』

の編集後記を加え、それからとくに重要なのは吉川真司先生から資料をいただいて、京都大学文学部・同大学院での講義題目を、教養部の助教授になってから退官まで全部入れました。今回編集して色々なことがわかりました。私の解釈が入りますが、それに沿って話をさせていただきます。

なお、ここに漏れている資料としては、研究所の彙報『青陵』第54号の岸先生の所長就任の際の挨拶があります²²⁾。写真の岸先生の隣にるのが若かりし頃の菅谷所長だと思います。それから『青陵』第61号に載っている先生の訃報です²³⁾。これは1987年1月30日付で発行されているのですが、よく見るとページ数が打ってありません。訃報には1月26日とあって本当に急遽入れたことがわかります。これらは目録に載っておりませんでしたのでちょっと触れさせていただきました。

前置きが長くなってしまいましたが、私は最後に大学院で教わった者として、こういう機会があればぜひみなさんに伝えたいと思っていたことをお話をさせていただきます。

まず、岸先生のお仕事の全容はこの目録で俯瞰することができわけですが、その中で「著作摘録」はみなさんあまり読まれないと思うのですが、実はそこに大変示唆的なことが書かれています。どういうことかと申しますと、論文名の後に論文の重要ポイントというか着眼点を数行で書いてあるのですが、そこに大切なことが書かれています。非常に微妙な言い回しですが、考証したものは考証したとあり、一方で何かを試みたという表記もあり、使い分けています。短い文章ですけれども、そういう点に注意して読んでいただきたいと思います。

それから次に、岸先生の著作目録を作ってみてわかったことを一つ二つお話ししたいと思います。岸先生の博士論文は『日本古代政治史研究』です。現在は大変便利な世の中になって、論文と審査結果の要旨をインターネットで見ることができます²⁴⁾。以前ですと大学院の博士論文の審査要旨を見るのはなかなか難しかったと思います。ここで主査の赤松俊秀先生と、小葉田淳先生、第2代所長の有光教一先生が論文調査委員なのですが、審査結果の要旨のところに大変重要なことが書いてあります。

「日本古代史研究が当面している最も大きな困難は、

記紀が史料として信頼性を欠いていることに原因があり、その欠陥を克服して記紀を史料として活用し得る研究法を発見することが強く要望されている。この論文の著者は、日本古代政治史を研究するにあたって、前記の課題の解明に深く留意し、関係史料を広くさぐってこれに詳密な分析を加えるかたわら、国文学・考古学等の関連学問の成果をもよく吸収消化して、独自の研究法をうち立てた。」

まさに的確な評価だと思います。岸先生はある意味では本当に『古事記』・『日本書紀』の信頼性との格闘をされ、また奈良時代史の研究方法を確立されたのです。

これは私の意見ではなくて、後述するいわゆる「大化改新詔否定論」を展開された原秀三郎先生がおっしゃっているのですが、東京大学の場合、古代史を確立されたのは坂本太郎先生だが、当時の東京大学で読んでいたのは『日本三代実録』と『延喜式』で、それは「延喜・天曆の治」で編纂された平安の史料だという言い方をされました。

岸先生は『続日本紀』を史料批判しながら奈良時代史の方法論を確立されました。今では当たり前のような郷里制施行期間の問題も当時は明確にはわからなかったわけです。そういったことも他の金石文なども使って丁寧にやられたということです。

岸先生は奈良時代より前の『日本書紀』の時代の問題にも格闘されて、色々なことを研究されているのですが、この博士論文を出す1967年の前と後では、京都大学の講義題目を見てみると色々な変化があります。

ちょうど栄原先生が学ばれた頃ですが、京都大学での講義題目で、例えば1960年代だと1960年に「古代豪族論」としていわゆる大化前代の有力氏族の研究、1961年に「律令制成立過程の諸問題」、1965年には「大化改新の研究」で、具体的には大化改新詔の信憑性の問題を扱っています。

1967年からは学部の演習で「日本書紀の研究」をしています、重要なのはここから大学院で『類聚三代格』の演習をされていることです。その後1970年の「正倉院文書」を除いて、一貫して『類聚三代格』の演習をされています。これは延暦11年から始まり、私たちの頃は貞観11年と、編年の形で読んでいます。

どういふ変化かという、1968年以降は、記紀とか、

「大化の改新」、いわゆる「大化前代」のテーマは講義題目で全く掲げていないということです。

ただし、『日本書紀』の「天武・持統紀」は別であったようで、栄原先生は先ほど「天武紀」を使われたと言われましたし、私が4回生の時、1980年の学部演習では「壬申紀」を読まれたわけです。私自身は先生はもうそういう『日本書紀』はやらないだろうと思っていたのですが、『日本書紀』をなぜやられたのだろうかと思っていたのですが、おそらくこれは『関ヶ原町史』史料編²⁵⁾の監修をされていたことと関係するのではないかと考えています。

いずれにしても1967年頃から原秀三郎先生を中心とした日本史研究会古代史部会がいわゆる「大化改新否定論」を展開する頃を境に、岸先生は講義や演習の内容をちょっと転換したと考えられます。

ちょうどその頃、藤原宮跡の木簡とか、しばらくすると飛鳥京跡から木簡が出ているわけですね。つまり『日本書紀』編纂より前の7世紀中葉から後半の紀年木簡が出てきているという状況になります。また1978年には辛亥年の「獲加多支鹵大王」の稻荷山鉄剣銘が明らかになるわけです²⁶⁾。その頃になって、もう講義や演習の題目を変えていません。同じ頃「画期としての雄略朝」²⁷⁾という、晩年の代表作が発表されています。これは『日本書紀』の紀年論の問題にも関わってきます。

そういう問題に踏み込んでいく流れの中で、岸先生の研究の中で最後となってしまったのですが、「額田部臣」と倭屯田²⁸⁾が非常に重要だと私は思っています。

なぜかという、1982・83年度、これは京大での最後の2年間なのですが、大学院・学部共通の「研究」という課目で題名が「日本古代史研究の回顧と課題」、そして説明として「過去30年間の研究を顧み、その要点を述べながら、再検討を加え、残された課題を明らかにする」という授業をされました。当時の大学院生は、これはぜひ聞かなくてはと思っていたのですが、実際には最終年度しかお話はされませんでした。そしてその時の授業の最後の方で先生は重要なことを言われました。

私がこれだけはお伝えしたいという今日の一つの眼目なのですが、先生が「奈良時代は70年くらいだが、実質は約60年だ。自分は奈良時代研究を中心にしてきて、また、60年ほど生きてきて時代の長さとともに奈良時

代というものはだいたいわかった。これから時代を遡ろうか、あるいは下ろうかと考えた時に、自分は遡って研究しようと思った」という主旨を言われたことを鮮明に覚えています。そこで、私はいわゆる「大化前代」というか、『日本書紀』の時代のことを退官後はされるのかな、と直感しました。

ちなみに岸先生の奈良時代の通史というのはなかなかないのですが、1973年に「奈良朝百年」というものが出ています²⁹⁾。興味のある方はこれをお読みになるとよろしいかと、経験的に私は思っています。

さて、この倭屯田の問題は、著作目録を見ると短いものを含めて何度も書かれています。これは出雲の岡田山鉄刀³⁰⁾のなかで「額田部臣」という銘文が出てきたことから始めて、「仁徳天皇即位前紀」に見える大和王権の経済的基盤である倭屯田が平安時代には均等名荘園で有名な興福寺領出雲荘になっていたという話です。考古学の資料とか平安時代の古文書、絵図、小字地名、民俗行事など『日本書紀』以外の様々な資料も用いて、岡田山鉄刀銘という『日本書紀』の編纂とは全然関係ないところから出てきたものから記紀伝承を読み直し、非常に慎重な言い回しなのですけれども、やはりそこに何らかの史実があったのではないかとすることに触れています。

これは橿原考古学研究所の所長になられて、記紀研究と考古学をつなげていこうとされたのではないかと私は思っています。『日本書紀』の史料批判には大変難しい問題がありますが、考古資料など『日本書紀』以外の史料を利用してもう一度史料批判を行うという方向をこの時点でお考えになっていたのではないかと思います。

これは私の解釈ですので真相はわかりません。先生は結局邪馬台国がどこにあったとも言われなかったように、非常に慎重な方でした。京都大学退官後は研究所に行かれ、記紀の史料批判を考古学の資料を使いながら研究したかったのではないかとというのが私の理解です。

最後に、岸先生が木簡学会の会長をされたことは、史料公開の公平化というところに最大尽力されたのではないかと思います。これも大変大事なことかと思います。

ちょっと駆け足になりましたが、時間も超過していますので、後でまた座談会の中で話したいと思います。

川上 リレースピーチでお話しいただきました先生方、どうもありがとうございました。

Ⅲ. 座談会

川上 定刻になりましたので、これから座談会に入らせていただきます。田島先生よろしくお願いします。

田島 それでは始めさせていただきます。まず岸先生の講義を受けた方や橿原考古学研究所で調査に関わった方にお話を伺いたいと思います。今尾文昭さんお願いします。

今尾文昭 昨年の3月にこの研究所を退職した今尾と言います。

私が研究所に嘱託として採用されたのは1978年8月で、まだ岸先生は京都大学にいらっしゃいました。当時は入って2、3年は「飛鳥京跡」を中心に発掘調査の心得ごとを学びなさいということで、私も飛鳥へ出向きました。当時、飛鳥の調査主任をされていたのが現在の菅谷所長です。調査の後半になると、岸先生がよく来られました。先生は調査の成果について説明をしっかりと聞かれ、アドバイスをされていました。私はそうした岸先生の姿を間近に見させていただいておりました。

色々ある思い出のなかでとくに紹介させていただくのは、先ほど中尾先生が紹介された都城制の研究学術友好訪中団に加えていただいたことです。25歳になった年(1981年)の夏で、この年の4月に正式に橿原考古学研究所に雇われました。飛鳥京跡の調査をしていた関係で、秋山日出雄先生から声をかけていただき、参加させていただきました。

私にとっては初めて人前でスライド発表をする機会でした。団長の岸先生をはじめ、直木先生、吉田晶先生という日本古代史の先生方、中国の王仲殊先生、徐苹芳先生、馬得志先生という学界を指導する先生たちの前で発表でした。飛鳥京跡の内郭と当時少し明らかになっていたエビノコ郭のスライドなども映しました。私は黒板に都城の平面形を描いたのですが、少し線を描くのを忘れたところ、後からちゃんと岸先生に加筆していただき、議論が正確に伝わるようになった記憶があります。

その後、山東・山西への訪中団に参加した時の記憶で強く残っているのは、私自身は京大での教え子ではないので恐縮なんですけど、その日はバスが随分遅い時間帯に孔子廟のある曲阜という街に着いたんです。みんなが集まってミーティングをする中で、先生が真ん中の席に座って脇机に手を置きながら、田島先生の言われた「学

而不思則罔 思而不学則殆」という孔子の言葉を座右の銘にしているということを説かれました。はずかしいことに私は意味がすぐにはわからなかったのですが、孔子の出生地で、静肅な宿舍の薄暗い明りの中で、教えてくださいました。

岸先生は私にとって、目の前に出ると背筋が伸びる先生です。専門家としてこの研究所に雇われて学び始めた初期の頃に先生のお声や行動を直接目の当たりにできたということは、この上ない幸せだと思っております。

田島 どうもありがとうございました。それでは同じく元樞考研所員で、龍谷大学名誉教授の岡崎晋明先生お願いします。

岡崎晋明 岡崎でございます。もう研究所を辞めて大変長い時間がたっております。

私が岸先生とお会いしたのは研究所の試験の面接の時に、面接官の中に先生がおられたことをはっきりと覚えています。その時の試験が5問のうち3問を選択して解きなさいというような問題だったのですが、私が解いた以外の問題について、これをどのようにあなたは答えますかと尋ねられ、先生が最後に「君、それはやっぱり書かなかった方がよかったね」と言われました。先生との最初の出会いはそういう形でした。

先ほど菅谷所長の言葉の中に、中国に代表として行くのはいやだという話がありましたが、その代表に回りまわって若い私になって、先生にはその一員として来ていただいた記憶があります。今から思うと大変楽しんでおられたと思います。バスであちこち回るのはですが、先生の席は必ず一番前でした。列車で移動する時間も長く、そういう時に先生と話す機会もあって、先生とそういう時間をもてたことはありがたかったと思います。

私自身は考古学を勉強していますが、今尾さんの話にもあったように、飛鳥で発掘調査をしていて木簡が出てくると先生が来られました。先生はコンテナの中にある木簡をずっと、本当に長時間見ておられました。そしてご自分で実測図をお作りになっていたと思います。木簡の削りかすも含めて、ご自分で実測図を描かれて、そこで浮き上がってくる字をきっちりと解読するという作業を、1点ずつされていた記憶があります。それは長時間の作業で、研究をするというのはこういうことなのだなということを先生の後ろ姿から、勉強させていただきま

した。そして帰りがけには木簡の材質が何であるとか、あるいは木簡の形状などは、君たちの方でしっかりと分類をするようにと言われたことを記憶しています。

そういった形で、先生とは大変短い時間ではありましたが、研究というのは一つ一つ、地道に積み上げていくものだということを、先生の後ろ姿から勉強させていただきました。

田島 岡崎先生どうもありがとうございました。中尾先生、訪中団のことで付け加えることはないでしょうか。

中尾 岸先生を代表とする訪中団は3回あって、1回目に私は秘書長という世話役として、2回目は副団長として参加しています。3回目は仕事の関係で行きたかったのですが行けませんでした。1回目の訪中の時には、行きがかり上、私が中国との交渉や雑用をしていました。

岸先生自身は1回目の訪中団で中国の各地を訪れたこととか、考古研究所でシンポジウムをしたことについて大きな意義を認めておられたと思います。

その翌年に今度は日本の方が中国の研究者を迎えて、「古代宮都の世界」という日中合同シンポジウムを東京の全日空ホテルで開催して、中国からは王仲殊先生、馬得志先生、徐萃芳先生が来られて、日本からは岸先生、西嶋定生先生、町田章さん、田辺昭三さんが参加しました³¹⁾。随分盛大なシンポジウムで、我々が中国へ行くだけでなく、中国からも来ていただいて日本で話をしようという日中学術交流が訪中を機会に実現したんです。

その時、私が訪中団の秘書長役で苦勞したことを先生がご存知だったんだろうと思いますが、岸先生から個人的に東京でのシンポジウムに招待していただいて参加しました。そんなこともあって、私にとって岸先生は随分親切で優しい先生というイメージがあります。

しかし直接の師弟関係にある方にとっては、非常に厳しくて、学生・院生の時にあまり自由に話もできなかったということだったんで、それは考古学研究室とは少し違うなあとと思います。

考古学研究室の先生はみんな怖かったですが、小林行雄先生を中心として日本酒研究会という飲み会が先輩も交えてあって、そういう中で先生方や先輩が話すことから色々なことを学んだ記憶があります。そのあたりで国史研究室とは少し様子が違うのかなと感じました。

今日少し言ったように、石野さんが「岸先生のこんな

笑顔を見たことはない」といった写真（写真3）があるんですが、岸先生はあまり呵呵大笑されるようなことはなかったんでしょうかね。

田島 ありがとうございます。それでは岸先生の授業を受けられた歴史地理学の戸祭由美夫先生にお話したいだと思います。

戸祭由美夫 奈良女子大学に勤務していた戸祭です。私は栄原さんと同様に京大文学部1965年入学、1969年卒業、修士課程1971年修了です。私とあと二人が一緒に古代の歴史地理をやっていて、非常に珍しかったんですが、そういうこともあって日本古代史も学びました。

1971年に博士課程に進む時、進学する者は同じ史学系の別の専攻の先生の試問も受けなければならないということで、地理学の先生に岸先生を加えた4人の試問でした。私は古代日本の村・郷・里という、恐れ多くも岸先生のされていたことを参考にして歴史地理をやっていました。

今日は1971年度の講義ノートを持ってきていて、これを見ると最初の日が11月14日なんです。大学紛争はまだくすぶっていて、やっと講義になって演習室みたいところで始まりました。

先生が正倉院文書などを細かく研究されていたことは存じていましたが、その授業は地図が毎回出てくる、もう歴史地理としか思えないようなものだったので驚きました。

最も印象深かったのは、5万分の1の地形図の奈良から京都までつなぎ合わせた大きいものを持って来て、平城京と平安京の位置関係などを説明されたことです。史料の細かい研究をされて、その一方でこうした大観的なこともお話しになるということで非常にびっくりしました。

先ほども話がありましたが、私も岸先生とは専門がちょっと違うので、我々にとってはそんなに怖い先生ではありませんでした。同期の高橋誠一君が、実は岸先生の奥様に音楽を習っておりまして、私も先生のお宅に伺ったことがあります。そういうこともあって、栄原さんたちのような直接の教え子の方とはちょっと違った形で、柔らかく接していただいたと思っています。

田島 戸祭先生、ありがとうございます。会場の方で他に授業を受けられたり、講演会でお話を聞いたりした方がいらっしゃいましたらお願いします。

西藤清秀 西藤と申します。橿原考古学研究所を3年

前に退職して、今は技術アドバイザーをしています。

私も関西大学大学院で岸先生の授業を受けさせていただきました。これはみなさんご存知のように非常に厳しい内容の講義だったと思います。

1985年に岸先生が所長になって初めての試験があったのですが、先ほどの岡崎先生の話と同様に質問が非常に厳しかったです。その時は稲荷山鉄剣の銘文が本当のものかどうか君はどう思うのか、その真贋の説明をしてみなさいというものでした。

面接は60人ほど受けていて私が最後だったと思いますが、夜の8時くらいになっていました。面接官は何人もおられて、多分泉森さんもいらっしまったと思います。私はその質問に冷や汗をかいて、しどろもどろで何を答えたかは思い出せません。必死の思いで答えたのですが、これは受からないのではないかと思います。私もその時32歳くらいで、ここで通らなければ考古学をやめなければならないのではないかと考えていました。

83年に研究所でまだ嘱託をしていた時、飛鳥で東橘遺跡を発掘しました³²⁾。ちょうど橘寺の東側で、3間・4間の非常に大きな建物が見つかりました。かなり大きな建物でしたが方位にのらず、西に振っている建物でした。

しかしその方位が嶋宮のものと合ってきます。ちょうど国文学の渡瀬昌忠先生が日並皇子挽歌などをもとに橘のほうに嶋宮があるんだということを書かれていた論文³³⁾があって、私はすぐにそれに飛びついて記者発表でも使いたいと思っていたんです。それが本当だったら各紙の1面に載るような話題だったと思います。ですが当時の所内の人達と議論する中、岸先生は非常に慎重で、「橘に嶋宮がのびるという話はできない」、「そういうことは一言も触れるな」と言われて記者発表資料を書いたことを覚えています。

このように岸先生は、稲荷山鉄剣についても、色々な調査に対しても厳しさがありました。真実を見極めるまできちっと調査をして、発表できるものも大げさなことをするなというのが、先生の姿勢だったと思います。

田島 記者発表の話がありましたが、泉森さんいかがでしょうか。

泉森 岸先生の学問的厳しさ与人としての優しさということをまだ話していないので、少し触れさせていただきます。

目録を見ると 1951 年から奈良女子大学にお勤めになっていまして、京都大学に戻られたのは 1955 年です。この頃の状況がどうだったのか、非常に気になります。

私は古い奈良県庁の木造の建物で勤務していたのですが、机の上に書類などがたくさんあって、図面を広げることができないので、いつも南側の興福寺の境内地にあった建造物係の興福寺出張所で作業をさせてもらっていました。

そこの主任で松本才治さんという岸先生のお父さんのお弟子のような方がおられて、この方から岸先生の奈良女子大でのこと、結婚された頃のことなどを色々聞いたことがあります。それは省略します。

先生には色々なことを丁寧に教えていただきました。ある時、月ヶ瀬で尾山代という杣の遺跡が見つかりました³⁴⁾。文献では「石打杣」という名前で出てきます。これに対して地元の人たちが非常に熱心で、遺跡を保存することができました。その時、先生と私が講演に行くことになり、先生は古代の杣について色々話をされました。

その帰りにお土産屋さんがあって、先生に言われて立ち寄り、「甘露梅」という梅をシソで巻いて砂糖づけしたお菓子を、お土産に買っていただきました。その日は私が運転手を務めたのでそのお礼の意味もあったのではないかと思います。

そこから奈良へ帰るまで甘露梅の講義が延々と続き、甘露梅の名前の付け方がうまくできているということとか、その製造過程まで丁寧に説明していただいたのを覚えています。

もう一つは所長になられた後、先生は愛知学院大学にも行かれていました。先生が愛知学院大学に行かれた日は、できるだけ直接自宅に帰っていただくように心がけていたのですが、どうしても会議などに出ていただくことが何回かありました。

その時先生は名古屋駅で「ゆかり」という海老せんのようなお菓子を必ず買ってこられ、会議の時に出示してくださいました。「これは一つの礼儀です」とおっしゃっていました。先生は研究所の職員に対しても色々なことで心遣いをされていました。

先生に対して私は一つ大きな失敗をしたことがあります。それは石舞台古墳の復元実験です。岸先生は復元実



写真 6 座談会の様子

験を、きちんとデータを分析して、どういう石や道具が使われたのかを研究することと理解しておられました。しかしこの実験はテレビ局が仕込んだ、お祭りみたいなものだったのです。それで先生は急に顔色を変えられて、ぱっと席を立たれて部屋を出ていかれました。私はびっくりして後を追いかけて行き、しばらく説得しました。先生は少し時間おいてから戻られて「勝手にやりなさい」と言われました。私たちはもう立つ瀬もないという状態でした。その時に作った修羅などもあって博物館で展示しようという話も出たのですが、「こういう不確定なものは展示に値しません」と先生に言われ、その後どこか別の所で展示することになったと思います。この時に先生の研究に対する非常に厳しい一面を教えられました。

私は先生の心労を煩わすことがないように、いつも努めていましたけれども、最後は行政上の問題など色々なことが出てきました。

その頃、毎月の現地検討会の時に先生と私と土橋理子さんと奈良の高畑のおそば屋さんに入りました。そこで天ざるそばを注文したのですが、先生が「私は天ぷらを食べてはいけないのですが、あなたたちは食べたいでしょうから食べなさい」と言われたのです。どこか悪いのかなと思っていたと、「実は私は黄疸なんです」と言われました。それで油っぽい物を食べることができないということでした。

私のメモでは、先生は 1986 年 4 月 12 日に県立医科大学に入院されました。黄疸だったらすぐに元気になって退院されるだろうと思っていまして、10 日ほどしてから私と石野さんと勝部明生さんの 3 人でお見舞いに行きました。先生は点滴をつけた状態でげっそりと痩せていて、私はびっくりしました。そこまで先生は無理をさ

れていたのか、入院されて10日ほどしかたっていないのにどうしてこんなに姿が変わったのかと思いました。

1987年1月の始め頃、当時事務の副所長だった岡田謙治良さんが私を呼んで「実は岸先生がこの前病院に家族を呼び寄せられた」と言われました。これが何を意味しているかは大体想像できました。それからしばらくしてA型の血液を輸血する必要があるということを知り、私と私の家内もA型だったので何人かと一緒に輸血に行きました。しかしその功もなく1月21日に先生はお亡くなりになりました。

その後、四十九日に奥様から「あなたたちの輸血のおかげで少しでも長生きすることができました」というお礼の手紙と一緒に商品券をいただきました。それで私は先生の記念のものと思い、退官記念の『日本政治社会史研究』の上中下3冊³⁵⁾をその商品券で購入しました。この書籍はこの研究所の図書室に入っています。これが私がとれた先生に対するお礼の形です。

そして先生が亡くなられてから3年間、お墓に花を供えさせていただきました。命日にはご家族が行かれるので、1週間前に行くようにしました。これが私のせめものの償いと思っていました。

私は調査課長として先生にだいぶ迷惑をかけました。先生からは多くのことを任せてもらっていましたが、当時の行政状況は非常に複雑でした。だから所長に言わずに勝手にする訳にもいかず、無理な相談もたくさんしました。

私は今日こんな話はしたくなかったのですが、岸先生に所長に就任していただく直前にかなりの大失策をしました。当時の所長は有光教一先生で、岸先生がもうすぐ京都大学を退官されるという話だったので、有光先生に「実は岸先生に副所長になってもらいたい」と余計なことを言ってしまいました。そうしたら有光先生は「副所長でいいんですか」と言われ、私は大変恥ずかしい思いをしました。

現在郡山城の中に一つ古風な建物があります。以前は市民会館と呼ばれていましたが、その建物はかつて興福寺北円堂の東側にあり、昭和40年頃は県立図書館として使われていました。それ以前は社事兵事課の建造物の事務所だったんです。その場所では会議などもよく行われました。大和郡山市に移築された後も藤ノ木古墳の調

査委員会を行いました。その時に岸先生が「親父がこのへんに座っていて」とかおっしゃっていました。あの建物に対して先生は強い思い入れをもっておられました。

藤原宮の調査自体も、日本古文化研究所の調査にお父さんの岸熊吉先生が参加されていた事情があり、他の遺跡以上に熱意をもって調べられたのだと思います。

田島 それでは榮原先生お願いします。

榮原 今の泉森さんの話を「もう私は何も言えることがないなあ」と思って聞いていました。

私は檀原考古学研究所の所長時代の岸先生をあまりよく知らなかったのだなあ、今日みなさんの話を聞いて本当に思いました。

田島さんが、岸先生が檀原考古学研究所の時代に何をしようとしていたのかという話をされました。『日本書紀』をいかに客観的な史料として使えるかということは、岸先生の生涯を貫くテーマだったと思います。それは非常に難しいことで、攻めるための道具がなかった時代に悪戦苦闘されたと思います。

それが考古学の調査が進み、木簡が出てきて、都城のデータが得やすくなった。さらに田島さんが言った「額田部臣」がある出雲の岡田山1号墳の鉄刀や稲荷山古墳の鉄剣が出てきて、『日本書紀』を『日本書紀』だけで研究するだけでなく、『日本書紀』以外のものでも研究する環境が整ってきたのです。

こうしたことを京都大学をお辞めになった後、岸先生は次の目標として定めていらしかったのではないかと漠然と思っていたのですが、田島さんのお話で改めてはっきり認識しました。それにかける時間がすごく少なかったのが本当に残念に思います。

最後に、泉森さんが命日の1週間前にお墓にお花を供えていたということでした。それでつながったことがあって、奥様と話をした時に「命日に行くとお花が供えられている」と言われて、その後にお知りになったのかかもしれませんが、奥様から「榮原さん、誰か知りませんか」と聞かれたことがあるんです。

泉森 これは今日初めて言いました。

榮原 泉森さんのお花だったんですね。私が言うのもおかしいですが、ありがとうございます。

田島 色々と貴重なお話を聞かせていただいたのですけれども、会場にマスコミ関係の方いらっしゃいましたら

お願いします。

小笠原敦子 毎日新聞の小笠原と申します。諸先生、諸先輩の前で大変おがましいのですが、岸先生について話す機会は今後おそらくないと思いますので、私もひとつだけお話しさせていただきたいと思います。

私は1979年入学、1983年卒業で、学部を出て毎日新聞に入りました。学部生の教え子ということになります。栄原先生や田島先生のお話にあったように、岸先生は学生には大変遠い存在でした。研究室旅行などの外に出る機会のとき、先生はお言葉が増えるのだなという印象をもっていました。

そんな私が、岸先生と一対一で15分ほど話したことがあります。1984年に兵庫県八鹿町（現養父市）の箕谷2号墳から出土した鉄刀に銘文が見つかりました³⁶⁾。めずらしい銅象嵌で、「戊辰年五月□」と記されています。

現在ですと記者クラブと調整して発表するのが普通ですが、その頃そういうことはあまりなくて、実はこれは朝日新聞の特ダネになるはずでした。この箕谷2号墳の鉄刀は、稲荷山古墳に次ぐ古い干支紀年銘の鉄刀でしたが、朝日新聞がこの情報を入手して、1面・社会面展開の記事を用意していました。

当時私は一年生記者で神戸支局にいました。その前夜兵庫県教育委員会担当の先輩が、県教委の人と飲んでいて何か出たということを聞きつけ、それを神戸支局総がかりで取材して数時間で突き止めました。朝日新聞のように1面トップではなかったんですが、1面に書ける場所だけは、なんとか確保して記事を展開しました。

その時に私が支局長から命じられたのは、この分野の第一人者である岸先生の談話をとることでした。それで「戊辰年五月□」という銘がわかった段階で、先生に電話でお話をうかがいました。まだ卒業して1年未満だったので、かろうじて先生の記憶に残っていたと思われるので、お話をいただくことができました。

朝日新聞は周到に準備していましたが、先生のお宅に行っても談話をもらえなかったそうです。先ほどからみなさんのお話にあったように、先生は確実なことしか話さない方で、「物を見ていないので何も話すことはできない」ということを朝日新聞に言われたと後に聞きました。

私は電話で「とにかく教えてください」と粘ったのがよかったのでしょうか、談話をいただくことができました。

て、よくやったと当時の上司にほめてもらったと記憶しています。

そのお礼をお目にかかってできないままに、先生とお別れすることになってしまいましたので、お礼を申し上げておきたいと思います。ありがとうございました。

田島 ありがとうございました。せっかくなので私からもいくつか付け加えさせていただきます。

目録の1979年のところに書いてありますが、我々も知らなかったのですが、岸先生が雄略天皇1500年式年祭の際に昭和天皇にご進講をされています。先生が退官記念に年譜を作った時に、先生から資料が提供されたのですが、その時にみんな初めてご進講されたことを知りました。このことを現在は『昭和天皇実録』で知ることができますが、先生はそういうことは当時一切おっしゃりませんでした。

先生は戦争中に海軍に行かれましたが、目録の正誤表・追加に書いたように、1958年の図書新聞に竹内理三氏の業績についての文章を書かれています³⁷⁾。そこには兵役に行く前に『寧楽遺文』の上巻を購入して、千葉の館山砲術学校で休みの日に下巻を購入したことが書いてあります。先生はこういう兵役の時のことも授業ではほとんどお話しになりませんでした。

著作目録を作り直す中でどうしてもわからないこともありましたが、また間違いもあるかもしれません。ご存知の方は教えていただければありがたいです。これを叩き台にして先生の研究を俯瞰していただいて、30年たった現在、古代史研究や橿原考古学研究所が何をしなければいけないかを考えていただければと思います。

栄原 岸先生は謎が多くて、私にとって最大の謎は、そもそもどうして古代史を研究されたかです。直木先生によると、京都大学に進んだ時には古代史をやるとすでに決めていたようです。お父さんの影響もあって徐々に古代史になったのかもしれませんが、おそらく三高³⁸⁾時代に心が決まってきたのではないかと思います。ここを明らかにしたいというのが私にとっての課題です。

岸先生にとって古代史とは何だったのかという問題、そこを明らかにしないと本当の岸先生の仕事の全体は理解できないのではないかと思います。

田島 ありがとうございました。だいぶ時間も超過していますので、このあたりで座談会を終わりにしたいと思います。

います。本日はどうもありがとうございました。

註

- 1) 田島公監修 2017『岸俊男先生年譜・著作等目録（稿）』奈良県立橿原考古学研究所
- 2) 岸俊男 1972「平城京の復元的調査研究（概報）」『平城京の復元保存計画に関する調査研究』奈良市
岸俊男 1974「遺存地割・地名による平城京の復元調査」『平城京朱雀大路発掘調査報告』奈良市
- 3) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編 1993『貿易陶磁―奈良・平安時代の中国陶磁―』財団法人由良大和古代文化研究協会
- 4) 栄原永遠男 1973「日本古代銭貨出土一覧表および附表」『続日本紀研究』第 169 号 続日本紀研究会
- 5) 末永雅雄編 1955『空からみた古墳』朝日新聞社
- 6) 岸俊男 1988『日本古代宮都の研究』岩波書店
- 7) 岸俊男編 1982『中国の都城遺跡―日本都城制の源流を探る―』同朋舎出版
- 8) 岸俊男 1981『日本の古代宮都』日本放送出版協会
- 9) 岸俊男編 1985『中国江南の都城遺跡―日本都城制の源流を探る―』同朋舎出版
- 10) 岸俊男編 1988『中国山東山西の都城遺跡―日本都城制の源流を探る―』同朋舎出版
- 11) 岸俊男 1959「古代豪族」『世界考古学大系』第 3 巻日本Ⅲ古墳時代 平凡社
- 12) 小林行雄 1955「古墳の発生の歴史的意義」『史林』第 38 巻第 1 号 史学研究会
- 13) 岸俊男 1963「紀氏に関する一試考」『近畿古文化論攷』吉川弘文館
- 14) 『日本書紀』雄略天皇九年五月
- 15) 奈良県教育委員会 1969『藤原宮』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 25 冊
- 16) 喜田貞吉 1913「藤原京考証 上・中・下」『歴史地理』第 21 巻第 1・2・5 号 日本歴史地理学会
- 17) 田村吉永 1936「藤原宮に就いて」『大和志』第 3 巻第 10 号 大和国史会
- 18) 福井県 1987『福井県史』資料編 1 古代
- 19) 岸俊男教授退官記念事業会編 1984『岸俊男教授年譜・著作目録』
- 20) 岸俊男 1985「学而不思則罔 思而不学則殆―著作摘録―」『日本政治社会史研究』下 塙書房
- 21) 京都大学文学部国史研究室編 1988『「岸俊男教授年譜・著作目録」補訂及び新補』
- 22) 岸俊男 1984「ご挨拶」『青陵』第 54 号 奈良県立橿原考古学研究所
- 23) 橿原考古学研究所所員一同 1987「故岸所長を悼む」『青陵』第 61 号 奈良県立橿原考古学研究所
- 24) 京都大学学術情報リポジトリ (KURENAI) <http://hdl.handle.net/2433/212106>
- 25) 関ヶ原町編 1984『関ヶ原町史』史料編―古代・中世・近世
- 26) 埼玉県教育委員会 1980『埼玉稲荷山古墳』
- 27) 岸俊男 1984「画期としての雄略朝―稲荷山鉄剣銘付考―」『日本政治社会史研究』上 塙書房
- 28) 岸俊男 1985「「額田部臣」と倭屯田」『末永先生米壽記念 獻呈論文集』坤 奈良明新社
- 29) 岸俊男 1973「奈良朝百年」『天平・奈良 ゼミナール』朝日新聞社
- 30) 島根県教育委員会 1987『出雲岡田山古墳』
- 31) 西嶋定生編 1983『奈良・平安の都と長安』小学館
- 32) 奈良県立橿原考古学研究所 1984『奈良県遺跡調査概報 1983 年度』第 1 分冊
- 33) 渡瀬昌忠 1971「島の宮（上）―人麻呂文学の基点―」『文学』第 39 巻第 9 号 岩波書店
- 34) 奈良県立橿原考古学研究所 1986『奈良県遺跡調査概報 1985 年度』第 2 分冊
- 35) 岸俊男教授退官記念会編 1984・1985『日本政治社会史研究』上・中・下 塙書房
- 36) 八鹿町教育委員会 1987『箕谷古墳群』
- 37) 岸俊男 1958「竹内理三の二つの業績―半生の辛苦（『平安遺文』・若々しい問題意識（『律令制と貴族政権』）―」『図書新聞』第 440 号 図書新聞社
- 38) 旧制第三高等学校